

奈文研

ニュース

No.51

Dec.2013

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577 奈良市二条町2丁目9-1
<http://www.nabunken.go.jp/>

✿ キトラ古墳との30年

2013年10月4日、キトラ古墳石室の盗掘孔が、新たに作製した石製の蓋で閉じられました。これにより、壁画の発見から30年の時を経て、古墳は再び眠りにつくこととなります。

キトラ古墳の最も大きな特徴は、高松塚古墳と同様に、大陸風の極彩色の壁画です。壁画は漆喰が壁から浮いている等、危険な状態にあったため、取り外して保存処理をおこないました。2001年に同じ機構として統合された、東京文化財研究所との共同作業です。現在は、すべての漆喰の取り外しが完了し、保存処理を進めています。

また、新たな壁画の記録手法として、高精度な写真を撮影し、それをつなぎ合わせたフォトマップを作成しました。これは実際の壁画と誤差がほとんどありません。

キトラ古墳の発掘調査は、文化庁の委託による奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の共同調査でした。通常の発掘とは全く異なり、石室内の環境を保持するための仮設覆屋内での作業です。石室内部を何度も確認することにより、壁画や床面の堆積土の状況が手に取るようにわかり、万全の準備が可能でした。発掘中に誤って壁画に触れては一大事です。あらかじめ壁画に保護処置を施し、石室内部に保護フレームを組み立て

ました。担当者の言葉を借りれば、「鳥かご」内での発掘です。石室の実物大模型の中で、組み立ての練習をしていた姿が思い起こされます。

石室内の堆積土は、小型のコンテナにそのまま入れて持ち帰り、奈文研で慎重な調査をしました。石室内は盗掘を受けていたとはいえ、木棺の飾り金具、大刀、玉類等、少なからぬ遺物が出土しました。そのなかで、直径1～2mmの微細なガラス玉はコンテナごとX線写真撮影をして所在を確認し、取り上げたものです。これまでの調査では見過ごしていたような微細な遺物で、慎重な調査の成果を示す遺物の一つです。

壁画の発見当初は、すべてがまったく手探りの状況でしたが、壁画が無事保護でき、遺跡も整備活用に向かっていくことになった過程は、一連のドラマを見るようでした。30年間の技術や機材の進歩がそれを可能にした面があるでしょうが、多くの人々の努力があったことを忘れてはいけません。その中で、同時期に進行した高松塚古墳の調査とともに、奈文研は中心的な役割を果たし、実力を遺憾なく発揮したと言えるでしょう。来年からは整備が進み、そこでも奈文研は大きな役割を果たすことが期待されています。今後とも各分野の専門家が協力しあって、文化財を保護する様々な活動に取り組んでいきたいと思えます。

(都城発掘調査部副部長 玉田 芳英)



奈文研による最初の発掘調査(2002年)



石室の閉塞(2013年)